

# 山形県における東北更新会

Tohoku Koushin Kai in Yamagata Prefecture

松 本 郁 代

Ikuyo Matsumoto

## はじめに

本稿においては、財団法人東北更新会（以下、東北更新会）について、全体の取り組みの展開を念頭におきながら、山形県におけるその活動状況について述べるものである。

東北更新会についての先行諸研究をまとめると以下ようになる。保健・医療の立場からは、今野勝子氏（今野1974；2003）・遠藤恵美子氏（遠藤1995）1976）・大岡美智子氏（大岡 1973）・高橋政子（高橋 1995）・保健婦自主研究グループ十五日会（同会 1998）などを挙げることができる。

また、建築学からの接近としては、住宅改善についての研究としてまとめられたものがある（林・荻原・黒石ほか 2002；黒石 2000）。しかしながら、各県それぞれの分会の取り組みまでも分析し、なお且つ東北更新会の全体像が解明されたものは、出されてない。この東北更新会の全体像を探りつつ、社会福祉学の領域からの問題関心によって、とりあげているものがある（松本 2004；2006；2007；2009a；2009b）。

たしかに、残存する史資料の限界という点からすると、全体像の把握は困難な作業であることは否めない。史資料については、当時の東北更新会についての報告のなかでは、次のように書かれていた。「本会は支部及分会の事業状況を周知せしめんが為め大体一年間に二回の印刷物を発行す。一回は主として説明統計を主とし他の一回は写真の蒐集を主とす」（財団法人東北更新会 1937a）ということから、報告書を残すことを予定していたことを視野に入れることが出来るが、現存する史資料は、すべての年度にわたるものではない。

ここでは、史資料の限界がある中で、残されているものを中心に、東北更新会の活動状況につい

て、山形県について述べる。研究方法としては、文献研究を中心に、一部聞き取りをおこなった。尚、本論文の記述にあたって、現在の保健師については、「保健婦」・「社会保健婦」などの当時の呼び方で記載をした。また、旧字体を現代のものにしたことをお断りしておく。

## 1. 東北更新会山形県支部による事業

### （1）東北更新会の組織

東北更新会は、1934（昭和9）年の凶作以降に、当初は「東北生活更新会」として、1935（昭和10）年5月に設立された。1936（昭和11）10月には、東北更新会の名称で、財団法人の組織となり、1948（昭和23）年頃まで続いている（今野2003）。

東北更新会の活動は、支部全体に関わる事業と町村を単とする分会活動に大きく分けられる。1940（昭和15）年度からは、分会から独立したところもあり、これも分会での活動を引き継いでいた。

東北更新会については、この団体が運営されていた当時、次のように、会の趣旨が説明されていた。「本会は昭和十年五月十一日東北生活更新会の名称を以て設立せられ東北地方の実情に際して其の生活の更新を期するを以て目的とし、東北六県に各支部内の数ヶ町村を指定して之を分会となし、其の各指定分会をして住宅の改善、妊産婦及乳幼児の保健“トラコーマ”の予防撲滅、栄養改善、整理整頓の奨励等の諸事業中当該分会に最適切なるものを実施せしむるを以て要義としたりしが幸にして本会設立以来政府及関係官庁の懇篤なる支援と支部及分会当事者各位の熱烈並民間篤志各位の援助等に依りて施設何れも其の緒に就くを致し」（財団法人東北更新会 1937a：頁の記載なし）と書かれている。

その後、1940（昭和15）年度についての報告や概要説明のなかでは、「独立更新会」という表現が登場し、分会の形態から独立して、ひとつの村でひとつの更新会を形成し、社会事業法の適用を受けて、助成金を受け取るところも出ていた。

#### （2）山形県における東北更新会の運営

山形県における東北更新会の事業について、1936（昭和11）年度には、前年度を引き継ぎながら、支部の事業として次のように記録されている。

「本県支部ニ於テハ本部ヨリ補助金八千八百円、ソレニ前年度繰越金約千六百円、合計一万四百円ヲ予算ニ計上シ昭和十年度二引続キ生活更新運動ヲ実施シ予期ノ効果ヲ収入ムベク努メタリ……中略……県下三地方ニ於テ市町村吏員講習会開催サル、ヲ機トシ“生活更新運動”ト題シーケ所約三時間ニ亘リ本会事業ノ趣旨ニ付講演ヲナス本部ニ於テ印刷サレタル“東北地方ニ於ケル妊産婦並乳幼児ノ保健”“トラコーマ予防撲滅”並“清潔整頓施設要項”ヲ各分会ハ勿論各小学校青年学校ニ配布シ本事業ノ趣旨ノ徹底ヲ期ス  
財団法人同潤会編輯ニ係ル秋田、山形県農村住宅素人設計懸賞当選図案集ヲ関係各方面ニ配布ス」（東北更新会1937b：249）

この記述の後に、栄養改善のための講演会や講習会を開催することや、山形県社会事業協会発行の『社会時報』に、東北更新会事業の趣旨を掲載して、各市町村や社会事業団体・方面委員に配布することなどが、予定として盛り込まれていた。たしかに、『社会時報』においては、東北更新会関係の情報が、掲載されている。ところで、1936（昭和11）年度の「清潔整頓施設勧奨事業」については、特に多額の費用が必要ないことから、講演や講習会を開催することによって、全県での取り組みを進めることが書かれている。

また、指導者等が県内外に出張することによって、講習をおこなったり、東北更新会の中でも実績をあげている支部に出向いて、研修を受けるといった取り組みをしている。その中で、斎藤潔氏が、本会委員として、東京から山形（東村山郡豊田村）に来て、取り組みの様子を視察している。尚、斎藤潔氏は、当時の東京市において、保健館勤務をしており、後に述べる小児科医である宇留野勝弥氏との交友関係があった人物である。

上記の独立更新会として、山形県においては、1944（昭和19）年9月末現在で、次のような更新会名が挙げられている。南村山郡では、上山町更新会・東澤村更新会・横澤更新会、東村山郡では、豊田村更新会・金井村更新会、西村山郡では、高松村更新会、最上郡では金山村町更新会・及位村更新会、南置賜郡では三澤村更新会・鹽井村更新会・玉庭村更新会・東置賜郡では、大塚村更新会・三井宿更新会・東田川郡では、長沼村更新会・西田川郡では、湯田川村更新会・加茂町更新会・飽海郡では、南遊佐村更新会・観音寺村更新会の合計19の独立更新会となっており、同じ時期の分会設置18を上回る設置となっていた（財団法人東北更新会1944）。

#### （3）講演会・講座・講習会

山形県における東北更新会の活動の中では、初期の頃から、さかんに講演会や講座が開かれており、生活更新の趣旨を徹底して県民に知らせるために、映画の上映を各地の小学校を借りて行っている。いわば、小学校が、生活更新のためのセンターとしての働きを期待されていたとも言える。

育児・育児衛生講演会については、「母の講座」として、繰り返し開催されている。また、山形県の場合、栄養改善に関する講習会や復習のための温習会、座談会が行われている。また、住宅改善のための大工を対象とした講習会が、1937（昭和12）年には、山形県立鶴岡工業学校・山形県立米澤工業学校を会場として行われている。

#### （4）保健婦をはじめとする人材確保

##### ①保健婦養成

山形県においては、東北更新会所属とする為の保健婦を、山形県社会事業会と東北更新会山形県支部との協力によって、いわば自前で養成をしていた。しかも、その養成については、すでに産婆・看護婦として仕事をしている人たちを集めて、養成を行うという形態であった。

その養成では、山形県社会事業協会の社会事業主事であった永田誠という人物が、保健婦養成に意欲をもっていたという証言が残されている。

これは、山形県における戦前戦中に保健婦となった人たちへの、地元の保健婦たちの聞き取りに

よって、すでに明らかにされていることである。その点で注目できることは、保健婦養成のための講習会において、毎日のように、「保健婦の仕事は社会事業であると毎日、毎回教えられたこと。」という証言が残っていることである（保健婦自主研究グループ十五日会 1998）。

永田氏をはじめとする社会事業の領域の人たちは、推測として、保健婦を養成して地域の保健・医療の第一線で活躍することに加えて、社会事業分野での対応にも期待をしたということであろう。その舞台回しの役を演じたのが、社会事業の人たちであったといえる。ちなみに、永田氏は、烏越隣保館の松田甚次郎のよき理解者でもあった。

ところで、当時、東京において、厚生省の役人であった谷口正弘氏に請われて、山形県の保健婦となった前川政子（その後の高橋政子）氏によっても、保健婦養成の様子が伝えられている（高橋 1995）。

その保健婦養成において、講師となった人物としては、東北更新会山形県支部において、実際に地域で活動している医師である宇留野勝弥氏も登場しており、さらに中央からは、医療利用組合関係者として、黒川泰一氏が招かれており、黒川氏の講義については、『社会時報』の中で、一部が文字化されて、現在に伝えられている（黒川 1940）。

## ②医師の確保

山形県における東北更新会の実践においては、医師の協力が各地でなされている。その医師が在住している地域の近辺は、もとより近隣の町村に出かけて診療活動を行っている。

次に述べることとなる妊産婦乳幼児保護し、検診を行い、必要な栄養についての指示を出すといった内容の活動であった。また、疾病についての調査・統計の結果をまとめるなど、その地域での疾病の様子をまとめている。

中でも、山形市立済生館小児科医長を務めながら、東北更新会の活動に加わっておられた医師として、先に挙げた宇留野勝弥氏がいる。東北更新会に関わるようになった点については、よく判らない。彼は、その後拓務省に入って、満州に行くまでは<sup>(1)</sup>、東北更新会において、医師として活動しておられた。宇留野氏の拓務省入省にあたって

は、友人の齋藤潔医師に勧められたということであり、乳幼児への対応については、それまでの経験を満州において、活かすということをも期待されていたことであつたようである（医事新法）。

また、宇留野医師以外にも、嘱託医として、地域在住の医師に委嘱をして、東北更新会に対しての協力をえるということが可能となっていた。

## 2. 山形県東北更新会における妊産婦・乳幼児保健事業

### (1) 分会・独立更新会の指定

山形県においては、1935（昭和10）年度に「助産及乳幼児保健施設並栄養改善」を行う分会として、東村山郡豊田村・最上郡真室川村・西田郡湯田川村が指定されていた（財団法人東北生活更新会 1936）。この記述のある写真帳には、豊田村において、子どもを診療中の医師として、先に触れた宇留野勝弥氏の姿が、すでに見られる。

翌年には、豊田村分会・湯田川村分会が上記の目的による分会として、前年度からの継続して、取り組みがなされている。

1936（昭和11）年11月には、豊田村分湯田川村分会に加えて、西村山郡郡醍醐村分会が指定されている。さらに、1939（昭和14）年度には、南村山郡樫澤村分会・東置玉郡大塚村分会が加えられている。

1940（昭和15）年度には、東田川郡長沼村分会・南村山郡瀧山村分会・西田川郡山戸村分会が指定されている。尚、豊田村分会は、その後1940（昭和15）年度には独立更新会となったが、醍醐村分会は、独立更新会とはなっていない。

### (2) 豊田村分会

豊田村分会においては、同じ目的の分会として、1935（昭和10）年度以降、活動を継続し、1938（昭和13）年度には、「小児健康相談」を医師によるものと保健婦によるものとの、出張の形態で行われていた。

1939（昭和14）年度には、豊田村分会についての記述は、次のように記載されている。

乳幼児保健については、次のような項目がその取り組みのメニューとして挙げられている。それ

は、小児保健健康相談ノ開設・乳幼児保護訪問・農繁託児所開設・補導員設置・「カード」配布・優良児表彰といった項目であった。

その乳幼児保護訪問では、5歳未満の子どもたちの発育状況を観察し、疾病の早期発見に努め、母親の衛生思想の向上を図るといったことが、目的であった。また、母親に対して、「我が子ノ発育」と題して「グラフ」様式のカードを渡して、検診のときに発育状況の記録を尺貫法に、医師が換算して、記入して渡していたというものであった(財団法人東北更新会 1941a)。

また、「栄養品及薬品給与」という項目については、単に栄養のある食品を子どもに食べさせよという指示を与えるだけではなく、「乳幼児ノ栄養不良及発育不良ノ主ナル原因ハ乳不足ノ結果人工栄養品トシテ米粉ノミヲ用フルタメ、動物性栄養分ノ不足ヲ来シテ居ルコトニ鑑ミ専門医ノ診察ノ結果母乳不足、栄養不良ト認メタルモノニハ医師ノ指示ニ依リ牛乳ヲ給与セリ」と記録されている(財団法人東北更新会 1941a:401)。

重要なのは、単に牛乳を飲むように指示をしたという点だけではなく、牛乳を給与したという点である。当時の庶民に、牛乳が入手できるということは、困難であったということは、推測のつくところであり、それを給与することによって、確実に栄養補給することが出来るようにしたということであった。単に掛け声だけの乳幼児保護ではなかったという点で、評価することが出来る。

ところで、1940(昭和15)年度には、「豊田村更新会」として、独立更新会となり、乳幼児保健についての事業を継続していたことが記録されており(財団法人東北更新会 1941b)、乳幼児保健についての事業を継続していたことが記録されている。

尚、この豊田村においては、次に述べるように、医療関係の専門スタッフを確保出来ており、さらに、先に触れた斎藤潔氏が、分会の状況を視察に来ていた。

### (3) 湯田川村分会

この分会での対応は、保健婦と村のなかから選定された指導員によって、進められている。単に、専門医が検診をするだけではなく、保健婦・指導

員で、家庭訪問を行って、成長のよくない子どもたちへの日常の目配りをするのが、効果があると判断されていた。

貧困家庭の乳不足の子どもについては、従来は、米の粉を飲ませていたのを、粉乳を支給するという方法がとられ、効果があがったという記録がある。

本来的には、乳幼児のための保健施設としての役割があるが、「治療的施設」としての側面を加えないと、十分な成果が望めないという指摘が、当時すでに出されていた(財団法人東北更新会 1937b)。

### (4) 西村山郡醜圃村分会

この分会設立は、1935(昭和10)年11月となっている(財団法人東北更新会1940)。この分会では、上記の豊田村において、専門医として子どもたちを診ていた宇留野勝弥氏が、当初専門医として登場する。1937(昭和12)年および1940(昭和15)年発行の『財団法人東北更新会概要』においても、彼の姿が、説明と共に、写真に残されている。

その後、1939(昭和14)年11月には、拓務省に宇留野氏が入られたことから、村医の北条医師が、専門医となっている(財団法人東北更新会 1941a)。

保健婦は、地域における実践だけではなく、他県に研修を受けに行くことがあった。例えば、岩手県での「妊産婦保健並ニ栄養改善臨地講習会」に出席するために、岩手県門馬村<sup>(2)</sup>に出張をしており(1949年10月)、他の分会保健婦との協議会に参加するなど、研鑽を積んでいた。さらに、保健婦講習会に、中央から前川政子氏が、この分会を訪問・視察している(1949年10月)。

ところで、貧困な家庭の子どもに対しての対応は、どのようにしていたのであろうか。それは、次の一文において把握することが出来る。

「恩賜財団済生会ノ診療券ヲ与ヘ治療セシメ或ハ診察ノ結果母乳不足又ハ母乳欠陥ノタメ栄養不良ナル者ニ対シテハ粉乳ヲ与ヘ代価ハ約三分ノ一ヲ寄付金トシテ分会ニ納メシメ専ラ乳児保健ニ努メツツアリ」(財団法人東北更新会1940a:371)と書かれている。その後、上記の北条医師に専門医が交替してからも、このやりかたは継承されて

おり、牛乳あるいは山羊乳を与えたとあり、さらに「乳児ノ死亡ヲ見ルニ母乳不足ノタメ栄養不良ニテ死亡セル者多数ナリシ為補助金ヲ交付シ山羊ノ飼育ヲ奨励シ母子ノ健康ナラシメント努メタリ」(財団法人東北更新会1941b)と書かれている。

上記以外の取り組みとしては、乳幼児の保護を目的として、1938(昭和13)年には、農繁期の6月に3日間の農繁期託児所を開設し、保健婦や高等女学校生徒によって、延べ80人の子どもたちの保育をしたとある(財団法人東北更新会1940)ことが挙げられる。

### 3. 山形県東北更新会におけるトラコーマ予防・撲滅事業

#### (1) 分会・独立更新会の指定

1935(昭和10)年度の山形県においては、「トラコーマ治療」を行う分会として、西村山郡高松村・南置賜郡三澤村・飽海郡南遊佐村が、指定されている(財団法人東北生活更新会:1936)。

その後、1936(昭和11)年度・1937(昭和12)年度・1938(昭和13)年度には、高松村分会・三澤村分会が、継続している。1939(昭和14)年度には、高松村分会・三澤村分会に加えて、長崎町分会が指定されている。1940(昭和15)年度には、西田川郡豊浦村分会と東村山郡金井村分会が指定されている。さらに、次に挙げる分会では、乳幼児妊産婦保健・栄養改善に加えて、トラコーマ予防撲滅、清潔整頓のための分会として指定されている。その分会とは、西村山郡醍醐村分会・南村山郡瀧山村分会である。

#### (2) 高松村分会

1936(昭和11)年に当時の名称である東北生活更新会から出版された写真帳の中では、すでに高松村でのトラコーマへの対応の場面が出てくる。当時の患者さんへの配慮から、ここでは写真を掲載することは出来ない。しかしながら、高松村分会においてのトラコーマ対策については、専門医である國井彦十氏の活動が、この対応を可能にしていたといってもよい。つまり、次のような記録をみることができる。

「高松村嘱託医師國井彦十氏ハ隣村西根村ニ於

ケル開業医ニシテ家ハ代々医ヲ業トシ本村トノ因縁浅カラザルモノナリ、氏ハ手腕卓抜患家ノ信用頗ル厚ク殊ニ其ノ専門トシテ眼科ニ就テハ……中略……本村ニ於ケル“トラコーマ”ノ手術ハ従来役場楼上若クハ部落公会堂ヲ使用スルヲ例トシタリシモ氏ガ本分会嘱託トナルヤ医院所在地ト本村トノ距離ノ近キヲ幸ヒ医院ノ手術室ヲ提供シ自家ノ看護婦ニ手伝ハシメ物的的ニ設備ノ完備セル所ニ於テ治療スルヲ得ルニ至リシハ本村ニトリ幸ヒナリ」(財団法人東北更新会1937:275)とあり、開業している隣村の医院まで患者を連れて来て手術を行う徹底ぶりであった。

尚、國井彦十氏は、東北更新会でのトラホーム対策を含めて、戦前・戦中・戦後のトラホーム対策について、総括を書かれている(國井1982)。

また、この分会においては、木製の洗面器を共同で使用することについては、トラコーマの感染につながることから、止めるように住民に指導し、その代わりに陶器製の洗面器を使用するように指導して、その改善がみられるようになったと記録されている。洗面器や手拭を共同で使わないようにするために、購入のための補助や斡旋をするといった工夫がなされていた。そればかりか、小学校においては、清水で顔を洗うために、子どもたちが蝗を取って得た収入で、井戸を掘るといったことをしていたのであった(財団法人東北更新会1938)。

このことからすると、高松村分会でのトラコーマ対策は、小学生から大人までの自覚のもとに、医師に期待しつつも、人任せになることなく意識的に、改善していくことが出来ていたと評価することができよう。ただし、トラコーマ対策については、国策に沿ったものであるだけに、患者の取り扱われ方について配慮する必要があり、取り組みが盛んであったからといって諸手をあげて、評価できるということではない。

#### (3) 南置賜郡三澤村分会

この分会は、1935(昭和10)年10月に分会として発足し、「時勢ニ即応スル人心刷新ヲ目標トナシ衣食住及衛生思想ノ向上発達ヲ期スル目的ヲ以テ“トラコーマ”治療中心トスル衛生向上発展ニ寄与スベキ各種ノ附随事業ヲ実施シ相当ノ効果ヲ

齋ラシタル」として、事業実施の趣旨が説明されている。尚、1940（昭和15）年度からは、三澤村更新会となっており、その理由としては、「相当ノ効果ヲ齋ラシタル」という点が示されていた（財団法人東北更新会1940b）。

#### （4）東村山郡長崎町分会

長崎町分会については、『社会事業』誌上においても、山形県社会事業協会が、報告を掲載しており、「中央社会事業協会社会事業研究所より選ばれて農村社会事業振興計画の実施を指定された町」（山形県社会課 1937：103）であった。社会事業研究所からは、福山政一氏や村松義郎氏が、直接この町に来て指導をするということがあった。1936（昭和11）年には、長崎町隣保協会が設立されている。また、隣保館が設置されて（小学校間借り）、そこで、宇留野勝弥医師によって、子どもの検診が行われている。写真にも、この検診の様子が残されている。

この分会では、地域の人たちから信頼のあったと考えられる太田医師が、眼科専門であることから、トラホーム対策に力をいれていた。地域の人たちは、「長崎の太田先生」と呼んでおり、その様子が伺える。また、齋藤潔医師の指導を受けた保健婦をおいている。

### 4. 山形県東北更新会における栄養改善事業

#### （1）栄養改善のための方策

山形県における東北更新会の活動をみていくと、史資料に書き残されている栄養改善指導についての記録の中で、東京にあった栄養研究所からの栄養士の派遣と本会所属の山形県在住の栄養士とによって、栄養指導が繰り返し行なわれていたことが判る。

たしかに、当時、厚生省から栄養士を東北六県にそれぞれ二人ずつ置いていたということがあり、東北更新会で兼務していたとされている（農村保健問題中央委員会 1940）ことから、栄養士によって、指導がなされていたことが判る。

さらに注目できることとしては、財団法人東北更新会（1936）『財団法人東北更新会要覧』に掲載されている集合写真である。その写真には、東

北生活更新会名称当時の会長であった齋藤実氏と理事の松村松盛氏と栄養研究所所長の佐伯矩氏たちが、埼玉県七本木村での「栄養食実施」について視察した際のものである。これを見る限りでは、山形県への栄養研究所からの人の派遣に先立ち、すでに栄養改善に取り組んだ地域への見学を行い、参考にしたうえで東北更新会の取り組みが、その後になされたことになる。

また、山形県からは、1937（昭和12）年に『栄養改善の葉』が発行されている。この葉には、佐伯矩氏の名前を確認することができ、佐伯矩氏がつくったという「栄養の歌」が書かれている。ただし、東京の栄養研究所と山形県でのつながりが、どのように形成されたかについては、解明できていない。

ところで、東北更新会山形県支部からは、東澤村の栄養改善についての報告をもとに、1938（昭和13）年には、『栄養改善施設概要』が出されており、いかに栄養改善について、山形県において力をいれていたかが判る。

#### （2）分会・独立更新会の指定

栄養改善のための分会についての記述が現れるのは、1935（昭和10）年度であり、先に述べた「助産及乳幼児保健施設並栄養改善」を行う分会として、東村山郡豊田村・最上郡真宝川村・西田川郡湯田川村が指定されていた（財団法人東北生活更新会 1936）。

しかしながら、1936（昭和11）年度になると、豊田村分会・湯田川村は、そのままこの「助産及乳幼児保健施設並栄養改善」施設として、その取り組みを継続しているが、最上郡真宝川村分会は、史資料には現れていない。その代わりに、その後、鹽井村分会・東澤村分会・東田川郡長沼村分会が、栄養改善のための分会として登場する。この頃から、県からの栄養士の派遣が各分会になされている。

その後、1938（昭和13）年度には、さらに及位村分会・長沼村分会・山戸村分会・大塚村分会が、主として栄養改善を行う分会として登場し、その後も分会として継続していく。

1939（昭和14）年度の分会の活動をみると、県からの栄養士の派遣に加えて、頻繁に東京の栄養

研究所からの栄養士の派遣によって、栄養改善の為の講習会がなされるようになった。

### (3) 各分会・独立更新会

#### 1) 及位村分会

この村では、栄養改善事業を1937(昭和12)年度から始めており、山形県衛生課からは、小林篁栄養技手が来て、指導を行なっている。小林技手の方法として、大人を対象に栄養改善の為の講習を行うだけではなく、小学校高学年の子どもたちに、実際の料理の方法を教えて、家庭でそれを実行することによって、栄養改善を家庭に根付くようにしむけた。また、この分会においては、栄養改善をすることによって、医薬品の使用量が減ったという記録が残っている(財団法人東北更新会1940)。

このことは、東北更新会での栄養改善に先立って行われた、群馬県における栄養改善の成果とも、共通するところであった(群馬県1933)。

#### 2) 鹽井村分会

この分会には、1938(昭和13)年度・1939(昭和14)年度と二年に亘って、栄養研究所の栄養士である森本喜代氏が派遣されている。1938(昭和13)年度には、1939(昭和14)年3月1日から6日間、1939(昭和14)年度には、8月26日から30日までの5日間である。

講習内容としては、野菜を活用して、魚介類の購入代金を節約する料理を伝授するというものであった。たしかに、野菜をふんだんに使用したメニューが示されているが、栄養献立表をみると、例えば、「南瓜コロッケ」には、「南瓜ハむして後ツプス、玉子ハ固ゆでニシ、枝豆ハ青クゆでル、さやヨリ出して置ク」といった説明があり、「オムレツ」や「エッグポテト」というように、頻繁に卵料理が登場する(財団法人東北更新会1939)。

当時、この地域で、庶民が気軽に入手できる素材として卵があったのかは、検討の余地がある。栄養改善講習のために、特別に参考例として示されたということも考えられる。

#### 3) 湯田川村

興味深い点としては、栄養改善前には、てんかんの発作がおきていた人が栄養改善後には、起きなくなったといった報告である(財団法人東北更新会1937b)。現在においても、高蛋白のメニューによって、てんかんへの対応がなされているということがあるが、実際のところの効果が、検証できるかどうかは、難しい。

#### 4) 東澤村分会および東澤村更新会

この分会においては、1935(昭和10)年11月に発会式を行って、栄養改善のための分会としての活動を始めており、さらに、1940(昭和15)年には、独立更新会となり、同年5月には、「社会事業法第六条ニヨル届出ヲ山形県知事宛届出ヲナシタリ」と記録されている(1940)このことは、先にも触れた。

1936(昭和11)年度の報告書においては、栄養改善の結果、すでに次のような効果があったとされている。少し長いが、引用しておく(財団法人東北更新会1937b:337)。

「一、栄養食以前ハ体力ガ弱ツテ居タ人モ実行シテヨリ体力ノ増進ガ向上シ強労働ニ於テモ疲レガ少ナイコト

一、売薬 服用ノ減少

一、主婦ニ於テ乳ガ少量ニテ困テ居タ人ガ実行シテヨリ非常ニ豊富デ乳児ノ健康ハ以前ヨリ増進シタルモノ二人アリ

一、食事ニ於テ老年ハ殊ニ副食物ガナイ為

一、食事ガ殊ノ他楽シク美味シテ戴ク様ニナツタ人モ多数居リ

一、眼病デ困ル人ガ疲レモ少ク元気ニテ働き居レリ

一、精神的ニ於テハ非常ニ明朗ニナリ人ガ活発ニナレリ

一、労働ニ於テ能率カ向上シ居レリ

一、血色一般ニ良クナレリ

一、睡眠良好 夢 以前ヨリ見ナクナツタコト 盗汗ガナクナレリ

一、疾病 感冒 一般ニ少クナレリ、胃腸ノ疾患モ

一、食事食欲

一、疲労

一、労働」

この記述からは、良いことづくめにみえる栄養改善の結果である。しかしながら、実際のところは、共同炊事に関わる栄養改善については、実費の金銭負担などで、問題は生じていたであろうと予測できる。

## 5. 山形県東北更新会における住宅改善事業

### (1) 分会・独立更新会の指定

山形県における東北更新会の活動において、住宅改善のための分会についての記述が現れるのは、1936（昭和11）年度である。南遊佐村分会・上山町分会・瀧山村分会・加茂町村分会・豊浦村分会・金山町分会・観音寺村分会が、その指定分会であった。

その後、1938（昭和13）年度には、東村山郡金井村分会が、住宅改善及清潔整頓のための分会として指定され、南置賜郡玉庭村分会・東村山郡高瀬村分会・飽海郡西遊佐村分会が、実績を挙げた分会として記述されている。それ以外では、翌年度に報告する予定として、次の分会が挙げられていた。それは、東置賜郡二井宿村分会・最上郡金山町分会・東田川郡十六合村分会・南村山郡上山町分会・最上郡及位村分会であった。実績をあげている分会としては、この年度では、西田川郡加茂町分会・西田川郡山戸村分会であったが、この二つの分会については、内容が詳しく示されていない（財団法人東北更新会 1941a）。

1940（昭和15）年度には、金井村分会・西遊佐村分会・観音寺村分会・高瀬村分会・玉庭村分会が、実績を含めて記述されている。

### (2) 分会・独立更新会等の活動

山形県における東北更新会による住宅改善のための分会についてみていくと、大差のない取り組みであり、窓にガラスをいれるということや、押入れをつけたり、風呂場をコンクリートで固めたり、台所の流しをつけるといった改善をしていたことが判る。

しかしながら、加茂町分会については、少し様相が違っている。それは、加茂町が漁村であることによる。農村については、政府も救済を行ってきたが、漁村については、放置されてきた結果、

漁村の住宅は、「空気新鮮ニシテ衛生上理想的郷ナル当海岸ガ比較的結核患者並乳幼児死亡率多キハハ宜ベナルカナト云ハザルヲ得ズ」（財団法人東北更新会 1937b）と書かれている。つまり、転地療養などで、空気がよくて、健康を回復するには良い地域であるのにもかかわらず、ここに住んでいる人たちにとっては、住宅が非衛生的で通風が悪く、悪臭までしているの、結局のところ、山形県が補助金を出して、住宅改善を行うこととなったというのである（財団法人東北更新会 1937b）。

ところで、山形県での住宅改善が、どのように進められていったのであろうか。それを知るひとつの手掛かりとして、素人が考えた住宅改善のための設計図を懸賞としての応募を促されて、応募する人が、どのくらい山形県で応募していたのかということである。それは、例えば、史資料の残されているもので確認することが出来よう。

つまり、1939（昭和14）年1月31日締め切りの募集で、山形県からは、121通の応募があったという。ちなみに、秋田県からは289通、青森県からは204通であり、岩手県から137通宮城県からは56通、福島県からは28通、の応募であった（財団法人同潤会 1939）。

この懸賞で、関心をもった人たちのうち、応募した人が最も多かったのは、29通の西田川郡からのものであった。121通のうち、1割をこえる応募が、西田川郡からのものであった。このことは、海に面した漁村の住宅について、改善することを当時の住民が望んでいたということの反映でもあると考えられる。さらに、この懸賞では、建築の専門家や厚生省の技師が、その審査員となっており、西田川郡からの応募者の作品が入賞している。切実な生活の現実を抱えている中で、住人自身が、その生活環境を変え、住宅改善をおこなっていくことに意欲的になることに繋がったという点では、東北更新会山形県支部等の取り組みは、ひとまず成果があったとみる事が出来よう。

### (3) 烏越隣保館関係

山形県における東北更新会についてみていくと、かの有名な松田其次郎の烏越隣保館が、この東北更新会活動に組み込まれていたことに気づ



く。しかも、建築家である今和次郎の設計による実験住宅に、入居していたのは、松田の関係者であったとの記述がある。それは、松田の著書である『土に叫ぶ』に登場する住宅と今の著書で紹介されている住宅改善の図面(今和次郎 1941)が、一致することによる。しかしながら、この今の設計によって作られた実験住宅に入居した期間は、長くはない(林・萩原・黒石ほか 2002)。それは、生活習慣を変更することが難しく、現在からみて合理的と考えられることが、入居者してみれば、慣れない生活となったことが、その要因であろう。

## おわりに

以上、山形県における東北更新会の活動について述べた。他県での東北更新会支部の活動となんら変わりはない。しかしながら、医師や保健婦といった医療の専門職者を確保し、保健婦養成を東北更新会が自らおこなって、保健婦を社会事業の人材として期待したという点については、注目することができよう。ただし、社会事業の領域の人たちは、自らの使命を裏方に徹して人材を確保し、必要な資材の流れを予算とともに作り出すことと考えていた向きがあろう。決して、表舞台で華々しく活動する職種ではないことを自覚していたともいえるが、その姿には、ソーシャルワーカーの制度などなかった時代であるが故に、社会事業の領域の人間として、いかに振る舞い、いかに下から社会事業を支えていくかの考えを常にもっていたように思われる。

ただし、住宅改善については、懸賞にも力をいれていたようであり、現実的な毎日の生活問題に対応するのが、社会事業の人間の職務と考えていたのかもしれない。栄養のある食べ物を摂取するということが、医師の指示であったとしても、不可能な生活状態であれば、それを社会資源として確保することの努力をすることが、記録の中に現れていたといえよう。

本稿においては、栄養改善について、他県支部との比較において、詳しく検討することができなかった。しかしながら、1939(昭和14)年度だけみると、山形県では7分会であり、宮城4分会・福島6分会・岩手3分会・青森1分会・秋田2分

会であり、東北更新会の指定分会数が、栄養改善について、山形県は多い時期があったことは確かである(財団法人東北更新会 1940b)。そのことから、山形県における栄養改善の取り組みについての記述は、あらためて書き起こしていくことにする。

最後になったが、本研究にあたっては、宇留野勝弥先生の御親戚の方々に、貴重な史資料を御提示いただいた。また、山形県医師会事務局長の海和邦博様、本学の吉岡利忠学長に示唆をいただいた。ここに御礼を申し上げる次第である。

## 註

- (1) 宇留野氏は、満州では主に医師の養成を行っていた。著書として、次のようなものが残されている。宇留野勝弥(1942)『開拓地の保健状況』満州移住協会であり、この本の中には、共同炊事についての記述もあり、当時の満州での生活状況を知ることができる。
- (2) 岩手県門馬村は、東北更新会岩手県支部の中でも、乳幼児保護について成果をあげていた地域。

## 文献

- 安藤玉治(1992)『「賢治精神」の実践』農文協  
 遠藤恵美子(1976)「1930年代の保健婦活動 その1 東北更新会における保健婦の活動」『医学史研究』47、13-19  
 原 徹・(1940)「農村の栄養改善を強張す」『保健教育』4(10)20-38  
 今和次郎(1941)『草屋根』相模書房  
 黒石いずみ(2000)『「建築外」の思考——今和次郎論』ドメス出版  
 保健婦自主研究グループ「五日会」(1998)『山形県における草創期の保健婦活動小史』訪問看護ステーション 村山  
 岩崎正弥(1997)『農本思想の社会史』京都大学学術出版会  
 群馬県(1933)『村落栄養改善実施成績報告』同県発行  
 林・萩原・黒石ほか(2002)「今和次郎の農村生活・住宅改善と東北地方農山漁村住宅改善調査」『財団法人住宅総合研究財団研究年報』28、107-118  
 河北新報社(1941)『翼賛東北の全貌』同社発行  
 小林 篁(1936)「栄養の知識」『社会時報』8(11)、6-9  
 国立栄養研究所 編(1973)『創立50周年記念誌 1920-1970』同研究所発行  
 今和次郎(1941)『草屋根』相模書房  
 今野勝子(1974)「東北更新会の活動から始まる」『保健婦雑誌』30(7)1-6  
 今野勝子(2003)「予防活動に生きる4大地に生き人々に

- 育てられて——ふりかえれば保健婦の道』やどかり出版  
窪田暁子・大友昌子・藤崎宏子・西村みはる (1992) 『戦前日本社会事業調査資料集成 第六巻』勁草書房  
岡井彦十 (1982) 『トラコーマ今昔』山形県寒河江市・西村山郡医師会資料調査委員会  
黒川泰一 (1940) 『保健事業』『社会時報』12(9)、11-16  
黒川泰一 (1975) 『沙漠に途あり——医療と共済運動』家の光協会  
黒川泰一・高橋新太郎 司会 (1940) 『座談会“農繁期の保健問題を語る”』『保健教育』4(10)、52-73  
楠本雅弘 (2003) 『農村経済更生運動と積雪地方農村経済調査所』『山形県地域史研究』28、1-18  
松本郁代 (2004) 『農村社会事業からみた東北地方農山漁村住宅改善調査』『弘前学院社会福祉学部研究紀要』4、65-71  
松本郁代 (2006) 『1930年代の岩手県における農村社会事業の一断面』『地域学』4、141-153  
松本郁代 (2007) 『今野勝子さんへの聴き取り』『東北社会福祉史研究』25、47-55  
松本郁代 (2008) 『宮城県における東北更新会』『弘前学院社会福祉学部研究紀要』8、70-77  
松本郁代 (2009a) 『青森県における東北更新会』『東北社会福祉史研究』27、51-58  
松本郁代 (2009b) 『福島県における東北更新会』『弘前学院社会福祉学部研究紀要』9、77-86  
松田甚次郎 (1938a) 『上に叫ぶ』羽田書店  
松田甚次郎 (1938b) 『農村に於ける隣保相扶の種々相』『社会事業』22(8)  
松田甚次郎 (1942) 『続上に叫ぶ』羽田書店  
中橋幸吉 (1942) 『保健婦の指導』南山堂  
農村保健問題中央委員会 編 (1939) 『農村保健運動叢書 第4輯 栄養改善問題と海産食料品』産業組合中央会  
農村保健問題中央委員会 編 (1940) 『農村保健運動叢書 第7輯 農村保健婦の話』産業組合中央会  
大岡美智子 (1973) 『保健婦の歴史』医学書院  
佐伯芳子 (1986) 『栄養学者佐伯知伝』玄同社  
寒河江市立高松小学校 (1974) 『高松の教育 百年のあゆみ』同小学校  
戦後日本の食料・編集委員会 (2003) 『戦後日本の食料・農業・農村 第1巻 戦時体制期』財団法人農林統計協会  
斎藤 潔 (1941) 『農村に於ける小児保健並に栄養改善事業』『厚生科学』1(3-4)、154-165  
齋藤國丸 (1936) 『本県に於ける社会事業概要』『社会時報』8(10)、2-14  
新庄市 編『新庄市史 第5巻近現代(下)』同市発行  
杉本好一 (1940) 『保健と栄養並に栄養改善の実施方法』『社会時報』(山形県)、12(1)、3-7  
杉本好一 (1941) 『健康増進と衣食住 改訂第三版』龍吟社  
高橋政子 (1984) 『写真でみる日本近代看護の歴史 先駆者を訪ねて』医学書院  
高橋政子 (1995) 『いのちをみつめて』ドメス出版  
高木和男 (1985) 『第一増補版 食と栄養学の社会史』白費出版  
高松宮出版 (1933) 『有栖川宮記念厚生資金 選奨録 第一輯』同発行  
東北生活更新会委員医学博士 齋藤潔 述 (1936) 『東北地方に於ける妊産婦並乳幼児の保健』同会発行  
東京帝國大学農学部農政学研究室 (1938) 『更生運動下の農村』岩波書店  
帝國農会 (1939) 『農業共同作業叢書第九輯 農繁期栄養食共同炊事の事例』同会発行  
宇留野勝弥 『満州開拓医興亡記』(1978) 『日本医事新報』2806  
財団法人同潤会 (1937) 『東北地方農山漁村住宅改善調査委員会議事録集』同会発行  
財団法人同潤会 (1939) 『東北地方漁村住宅設計懸賞募集当選図案集』同会発行  
財団法人協潤会 (1939) 『更生農村の模範的事例』同会発行  
財団法人国民栄養協会 (1981) 『日本栄養学史』秀潤社  
財団法人東北更新会 (1936) 『財団法人東北更新会要覧』同会発行  
財団法人東北更新会 (1937a) 『施設事業状況』同会発行  
財団法人東北更新会 (1937b) 『昭和11年度各支部及分会施設事業状況』同会発行  
財団法人東北更新会 (1937c) 『財団法人東北更新会の概要』同会発行  
財団法人東北更新会 (1940a) 『昭和13年度各支部及分会施設事業状況』同会発行  
財団法人東北更新会 (1940b) 『財団法人東北更新会の概要』同会発行  
財団法人東北更新会 (1941a) 『昭和14年度各支部及分会施設事業状況』同会発行  
財団法人東北更新会 (1941b) 『昭和15年度各支部及分会施設事業状況』同会発行  
財団法人東北更新会 (1944) 『支部管内分会更新会調』同会発行 (国立公文書館所蔵)  
財団法人東北更新会山形県支部 (1938) 『栄養改善施設概要』同会発行  
財団法人東北生活更新会 (1936) 『施設事業状況一斑』同会発行  
山田慎三 (1984) 『栄養指導前史』菜根出版  
山形市立病院済生館 (1993) 『山形市立病院済生館 創立120周年記念 思い出の記』同病院発行  
山形県 (1937) 『栄養改善の果』同県発行  
山形県社会課 (1935) 『山形県社会事業概況』同課  
山形県社会課 (1937) 『東村山郡長崎町隣保協会を觀る』『社会事業』20(10)、103-111  
山形県社会課 (出版年掲載なし) 『農繁期共同炊事の奨め』